

P&E2010 展覧会記録 ■Aグループ

2010年8月19日(木) - 8月28日(土) [月休] 開廊時間:11:00 ~ 19:00 (土・日曜日~17:00)

【コメンテーターによる講評】 ◎八木光恵(アートコートギャラリー代表)

P&Eは新たな作家との出会いであり、作家の成長過程に触れる機会です。
自分のやり方でやるべきことをやり続ける。この意志を強く持つことが作家の条件です。
作家の手を離れても「読み解かれてゆくもの」になっていること。これが完成作品の条件です。
こんなことを考えながら、ABの2会期の展覧会出展作品について綴りました。

■Aグループ | 絵画・平面作品を中心に |

高岡美岐さんは達人な作家だ。87点の小作品の集合で表現している新宿歌舞伎町の夜の光景からの連作は、1点の大作であるよりも、力強く、興味深いものだ。写真の連写のような、小作品の連作形式は、高岡さんにピッタリの表現で、これからも追究してほしい。

古澤さんの作品は、上質の抽象絵画に銀色の角棒が取り付けられている。画面のマチエールと金属のバーが響き合うコンビネーションの良さが魅力となっている。ベテラン作家らしい安定感だ。

山下ジュンコさんの絵画は煌めく光の集合だ。作家の学校歴に染色コース卒業とある。その出会いが、今も作家にあるのだろうか。染色作品のような、柔らかな世界が立ち上る。山下さんは、描いていて楽しく、次へ次へと繋がる発見や試みが見つかるのだろう。その楽しさに加えて、作品を深めて行くことも意識して、ステップアップを図ってほしい。

田中浩一さんの作品「魔都(まと)2010」は、ものすごい存在感だ。メッセージの打ち出しも顕著だ。中央部には勤め人のシンボルであるホワイトカラーが層を成して重なっているが、それは、社会に生きる人々の苦悩を映している。

田中さんは展覧会開催中に、突然に亡くなった。亡くなる前日が本展覧会の公開ディスカッションと交流会で、アートを語りあうひとときをともに過ごした。社会に対し、仕事に対し、そして絵画制作に対して、誠に真摯な態度でおられることを窺い知った。忘れられない思い出となるでしょう。

福田さんの作品には、常夜灯が登場する。単純化された形象は、ユーモラスでもある。一度の出会いで覚えられる常夜灯というモチーフに加えて、色使いの上手さが目を引く。注目して行きたい。

野田万里子さんはセンスの良い作家だ。作家ファイルには、着色した塩などを用いたインスタレーションがあった。出展作もそうだが、どれも表現の壺を得ている。今回の6作品は、鉛筆(うち1点は赤鉛筆)によるドローイングだ。何気ない落書きのような線描から、制作はスタートする。拡大コピーを繰り返し、それを正確に描画する。その行為に見え隠れする、意味と無意味、費やされた相当の時間。それが作品を深くする。今後の展開に期待している。

五影華子さんの出展作は、モチーフと作家との間にギャップを覚える。五影さんがほんとうに描くべきモチーフは、他にあるのではないだろうか。対象を自分に引き寄せ、自在に描き込める、自然体でつきあって行けるモチーフとの出会いが待たれる。

田中七星さんの発表作品は、縦7列、横33段、合計231枚のドローイングだが、作家が毎日繰り返す「ドローイングする」行為そのものを作品として捉えたい。これからも毎日続けられるドローイングが、どのように展開されてゆくのかに期待したい。

喜久田さんは、人間の都合で、観賞魚として作り替えられてしまった生き物である金魚を、大胆にデフォルメして表現する「金魚」の作家だ。近頃は、様式として琳派を取り入れた表現にチャレンジ。歌舞伎の見得を切るかのように、ポーズを決めた絢爛豪華な金魚が画面に踊る。制作への意欲を熱く感じる。

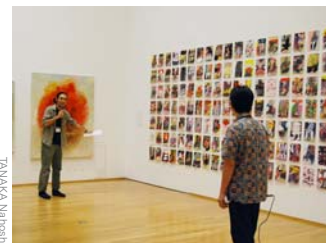
林田健さんの「残光(雨湿)」はこだわりの絵画作品だ。教職にある作家は、勤め先のトイレのタイル床を淡々と、しかしシツコク描いている。何枚も飽かずに描いている。作家が制作に費やした時間は作品を強くするものだが、林田さんの作品の前に立つと、そのことを意識する。同時に絵画のモチーフとして、古びた床タイル、排水口を繰り返し描いた作家の意図を慮って困惑する。観者の読解力が試されているような、そんな気持ちにもなる。

岡村有利子さんの作品からは、表現したい、発表したい、という意欲を強く感じる。アニメを作ってきたと聞く。今回の発表は静止画のみだったが、それと同時に、短くても動画も見せてほしい。アニメと同時に見せることで絵画が、動きに繋がるものとしてのフレッシュ感を帯びて見えれば良いことと思う。いかがだろうか。

河井いづみさんの出展作は、旅の、あるいは外国での暮らしのエッセイを読むような絵画だ。作家が出会ったシーンが昇華し、再構築されて、作品となる。それらは静寂であり、且つ豊かな空気感を生み出している。イラストレーターとしても仕事しておられると聞くと、イラストレーションとは意識的に区別して制作発表を続けてほしい。



TSUKAGE Haruko



TANAKA Hiroshi



KIKUTA Naomi



HAYASHIDA Ken



OKAMURA Yuriko



KAWAI Izumi

【Aグループ】公開ディスカッションの様子(8月21日)

【コメンテーターによる講評】

■Bグループ | 立体・インスタレーション作品を中心に |

◎八木光恵(アートコートギャラリー代表)

川本明香さんの作品は、ビビッドな黄色の地色に、キラキラ光るビー玉やビーズ、カラフルな糸で飾り付けられた空想上の動物が4体。2体は自立する立体で、床置き。あとの2体は縫製前のぬいぐるみのように、まだ布の状態に壁に展示されたが、周辺の床、壁、天井にも、楽しさのパーツがあふれる展示となった。地色の鮮やかな黄色は、賑やかな飾りを最も引き立てる色だと云う。子どもたちに見せると、過剰なまでに加えられた装飾を随所に発見し、大喜びするようだ。子どもたちに喜びを届けることが、川本さんのアートだ。素敵なことだ。続けてほしい。

鈴木紗也香さんは、大学生だ。学校の課題制作から解放されたときに、小作品をシリーズで描いている。適度に力の抜けた、「ゆるい」絵画。スケッチ。軽やかさがある。断片的な表現が、一塊になって展示されると、そこには日常からのリズム感と空気感が浮かび上がる。そこが魅力だ。

大石麻央さんは擬人化された着ぐるみ状作品、3種4点をインスタレーション。それらは現時点ではまだ、断片的な状態だ。伝えたいことはなにか。表現したいことはなにか。それらが十分に形を結ぶまで、さらに作り込んでほしい。展示には工夫が見られたが、観者の心のスイッチに揺さぶりをかけるまで、あと一歩だ。

土居由布子さんの作品は薄づくりの陶板だ。100枚以上を台上に並べて展示した。「一枚ずつ丁寧に向かい合って制作した作家の痕跡」が作品だという。制作時の作業台の高さに展示することで、作家の仕事の全てを見せようとの思いの展示だったと聞いた。しかしながら展示台は、非常に大きく目障りなものとなり、鑑賞をかえって妨げるものとなったことが悔やまれる。

酒井雅恵さんの手技は徹底している。ひたすらの縫いの仕事だ。手を動かすことからの満足感や、出来映えを見ての達成感。しかしここでどどまっって良いのか。酒井さんの作品にとってのオーディエンスは誰なのか。誰に何を見せたいのか。手芸ともとれる。現代工芸にもなる。作家として何を目指すのか。それを考えながら、進んでほしい。

平賀喜郎さんは、自分で選んだ世界の有名人100人の制作にチャレンジ中。出展作は、状況描写のある絵画パネルに、セラミックに着色の陶造形で人体を表現してセット。今後も自身が選ぶ世界の有名人を、作り続けるという。頑張ってほしい。

須藤絢乃さんは立体と平面の2種類の作品を出展してくれた。立体は真っ白い少女が、こちらも白い、騎馬遊び(西洋の昔の)に使うような木馬をそと引き寄せている。少女の長い髪は、美しい艶のある麻だ。何かに魅了されたように眼を閉じたまま、面を上げている。平面はポートレート写真だ。少年は少女に、少女は少年に扮している。輝く美少年、美少女たちが写っている。立体、平面ともに表層的なものを越えて、読み解きたいが、その仕掛けはまだ見えてこない。

池田精堂さんは木を素材とする2作品を出展。製材された木片をつかった屋内作品と自然木を使用した屋外作品。どちらも大型作品だ。前者は、障子の棧のような木組みで、昆虫を連想する形状を表現。接合には釘等は使わず、指物のようにほぞを用いている素材と技法の組合せも、身近な生き物を類推できる形状も、心地よいものである。後者はギャラリー中庭に展示された。皮を剥がれて、素の姿となった自然木の枝が、ジョイントによって複雑に繋がれ、都市の地下を巡るインフラのようである。前者は2年前の作品だが、ギャラリーから希望し、リメイクしてもらった。後者は最近取り組んでいる作品で、今後も展開が試みられるようだ。双方向とも期待できる。

濱口拡美さんは壁高5.5m、天井高8mの展示室を意識し、大型作品にチャレンジした。制作についても、設置についても工夫を重ね、技術的な未踏部分を克服。今後の制作への自信に繋がったことと思う。

由留木康人さんの作品からは、制作に対する真摯な姿勢が伝わってくる。セラミックながら極端に薄く仕上げられており、風に揺らぐほどの作品だ。その儚さが美しい。ものを作る技量の方が先行しているように見えるが、コンセプトを掘り下げることも制作の継続には重要だ。意識して、両方を追求してほしい。

並木文音さんは作家自身の身の回りのものを焼いて灰にした。もろい石膏型がその灰の器だ。作品はドイツ、ポーランドなどの戦争や差別の強烈な負のイメージを想起させ、観者は深い意味を読み解かねばと、身構えてしまう。しかし、若い並木さん本人の思いは、そんなに重いものではないようだ。



SHIRO Ayano



IKEDA Shido



HAYASHI Hiromi



YURUKI Yashiro



NAKAI Ayumi

【Bグループ】公開ディスカッションの様子(9月4日)

P&E2010 展覧会記録 ■Aグループ

2010年8月19日(木) - 8月28日(土) [月休] 開廊時間:11:00 ~ 19:00 (土・日曜日~17:00)

【コメンテーターによる講評】 ◎加藤義夫(インディペンデント・キュレーター)

「P&E」展も6回目を迎えた。公募形式の展覧会は、5回目以降が勝負。マンネリ化するからだ。幾つかの公募展の審査に関わってきた私から見て6回目のP&E展は、行政主導型大型公募展に負けず劣らず健闘しているという印象を受けた。質的に高いレベルを誇っているととても過言ではない。

Aグループにおいては、私と同世代作家の応募者、50歳代の作品が頑張っているし、Bグループでは大学生や大学院生といった在学中の若い作家が非常に多く、本展の作家層の幅の広さを見せつけられた。多くの公募展は年齢制限があり若手作家の登竜門として存在しているが、「P&E」展は年齢制限なし、ジャンルなしといった自由度の高いものだ。そこでは異種格闘技のようなバトルが展開される。グループ展の醍醐味であり、作品の力を試される良い機会でもある。

さて、ここで訃報をお伝えしなくてはならない。Aグループの田中浩一さんが展覧会会期中に突然亡くなられた。訃報を聞いた時、私も田中さんと同世代なのでかなりショックを受けた。本展が最後の展覧会となったのは非常に残念であり無念だ。ご冥福をお祈り申し上げます。

■Aグループ | 絵画・平面作品を中心に |

高岡美岐さんの絵画《08.12/4歌舞伎町》は、東京の新宿歌舞伎町の姿を連続写真におさめ、その写真からサンプリングした部分を絵画に置き換える手法で作品づくりがおこなわれている。夜の盛り場、繁華街のネオンサインの光をとらえて絵画に表現。19世紀の印象派が、太陽の光をとらえたように、21世紀の都市の光、すなわちネオンサインを取り込むことで現代を語ろうとしているように感じた。夜の都市風景の光はあらゆるものに乱反射し浮かび上がる。コマドリした写真は、その連続性のためか時間という概念も感じさせるものだ。完成された作品よりも、時間を切り取ったような連続性を持つ、複数のスケッチというかドローイングに興味を持った。

古澤信二さんの3点組の絵画《untitled》は、表現主義的に描かれた絵画の上に銀色に輝く横長のバーが画面上部に取り付けてある。作品からは感性と理性がせめぎ合っている様子とも受け取れる。米国の抽象表現主義やミニマルアートの洗礼を受け通過してきた世代ということが感じられる作品で、モダニズムを駆け抜けた時代の美術であり証言者としての側面が感じられた。

山下ジュンコさんの絵画《N》は一瞬、草花を描いた絵画に見えるが、本質的には、ほとぼしる光をとらえたものだろう。カメラのファインダーから望遠レンズを通し覗いた時のような世界。ピントが合う迄の曖昧な空気感と光をとらえているようで、視覚に強く訴える作品といえよう。

田中浩一さんの絵画《魔都(まど)》は、現代サラリーマンの悲哀に満ちた表現であり、今日の都市社会の問題を多く内包している。現代社会に感じるストレスや息苦しさ、日々の肌感覚として伝わってくる。画面からは、頭がなくネクタイをしめたパベルの塔のような身体と、蛇のように襲いかかるビル群がそれらを物語っている。誰もこの作品を見て現代社会と人間との関係を考えるきっかけになることだろう。

福田良亮さんの絵画《常夜灯》や《遠くて近い場所》。一見、抽象的な色面構成を基本としているが具象的絵画でもある。また優れた色彩感覚で観る者を魅了する。その色彩は独自性が高く調和がとれ、福田絵画の大きな武器となっている。

野田万理子さんの絵画《A girl》は、普段何気無く何処かに落書きしたドローイングを拡大して異なったイメージを創ることに成功している。都市の中でウォールペインティングのように拡張拡大していければ、あらたな可能性を秘めた作品として期待できるものだった。

五影華子さんの絵画は、幻想的な雰囲気漂う心象風景で絵作りと内容は申し分ないが、作品の色調が大きな壁面を分断させるような展示になってしまい、展示空間を上手く生かせる事ができなかったようだ。展示構成というプレゼンテーションに本人の自覚が欠落しているところがとても残念だと思った。

田中七星さんの絵画《線欲》は、ドローイングともいえる絵、全231点で構成され、全体的にはおおきな壁画と言っても過言ではない。日々の感情の呟きを線描と優れた色彩感覚で絵日記のように綴った作品群に圧倒される。驚くべきことに全231点のどれをとって見ても集中度が高く、密度の高い作品であり、マンネリや手抜きを感じさせないところがスゴイ。

喜久田尚美さんの絵画《風神・雷神図》は、金魚が主役。江戸期の日本美術の代表的な作品俵屋宗達の「風神雷神図」から引用。江戸期に「風神雷神図」の模写や引用は、尾形光琳、酒井抱一、葛飾北斎などがある。表現力や技術力のある作品に仕上がっている。アニメや漫画的なユーモラスな表現が今日的でもあろうか。また、金魚というアイコンがユニークだと感じた。

林田健さんの絵画《残光(雨湿)》は、抽象絵画のように見えるが、眼を凝らしてよくみてみると古びた床タイルの描写であり、普段私達は俯瞰的に見ているトイレの床が立ち上がり、ギャラリーの壁面に並ぶことで普段とは違った見馴れない光景を映し出している。ものの認識について教えてくれる作品だといえよう。

岡村有利子さんの絵画《SILENTSIREN》淡い色調と柔らかな空間が印象的だ。また一方、絵に動きや物語を感じさせる力がある。動きのある画面からは、アニメーションの一部分一瞬を切り取ったような作品にも思えた。方向性としては映像作品として発展させると面白いと感じた。

河井いづみさんの絵画は、紙に鉛筆による作品で少しシュールなイメージを持っている。イラストレーショナルなまともすぎる嫌いがあるが、技術もセンスも良いので上手く展開していけば期待できる。



TAKAOKA Miki



FURUSAWA Shinichi



YAMASHITA Junko



TANAKA Koichi



FIKUDA Yoshiaki



NODA Mariko

【Aグループ】公開ディスカッションの様子(8月21日)

【コメンテーターによる講評】

■Bグループ | 立体・インスタレーション作品を中心に |

◎加藤義夫(インディペンデント・キュレーター)

川本明香さんの作品《くびなが恐竜》などは、黄色を基調としたアジア的な雰囲気包まれたインスタレーションだ。弾けるようビビッドな色彩構成に目が覚める。ポジティブなイメージが魅力的な作品といえよう。

鈴木紗也香さんの絵画は、パステルカラーの淡い色調でなげない日常を語りかける。さりげなく気を抜いたところにこの作品の魅力があるようだ。優しい光とほのかな薫り漂う。自然体をすなおに表現して描かれた作品に鑑賞者もリラックスすることだろう。

大石麻央さんの作品は、擬人化された鳩や狸や犬の着ぐるみのような立体作品。展示としてトライアングルに構成され、安定した空間を創造し成功している。会場を見上げると鳩が二羽、床には横たわっているのは瀕死の狸か、そして向こうには犬がはいつくばる。何か物語がはじまりそうな予感さえてくるが、すでに物語ははじまりクライマックスを過ぎているようにも感じられる。鑑賞者に刺激的なイメージを与え創造力を喚起するところが面白い。

土居由布子さんの陶芸による作品。巨大な展示台上に薄く焼いた陶板が幾つも並ぶディスプレイのセンスはいただけない。作品をより良く見せるための工夫が逆効果になっている。陶板の持つ軽やかで繊細な魅力が活かされていないからだ。作品の持つ本来の魅力を展示構成と照明で如何に引き出すかという、プレゼンテーションに配慮が必要だろう。

酒井雅恵さんのテキスタイルアート《リボルバー(おしゃべり爆弾回転式拳銃)》は、一瞬、花をイメージさせる。ファイル審査の段階では満場一致で通過した酒井作品。既製品の綿布のギンガムチェック生地を加工したもので、マニャックなテクニックに驚く。

平賀喜郎さんの作品は、世界の話題の人(架空の人物?)に焦点をあてて、平面と人物彫刻で構成されている。この構成と演出はアメリカのジム・ダインやジョージ・シーガルの作品を彷彿させるところが…。しかし、センスは良いしコンセプトも明快であるところは評価できる。

須藤絢乃さんの立体作品と写真をベースにした平面作品には、彼女なりの美学と美意識が内在し、中性的な美意識に包まれていると感じた。性差というようなジェンダー問題ではなく、少女や少年期の繊細な感性を大切にしたいと思いが強い作品と感じた。立体作品の人物は本人をかたどったものだと思う。ロールプレイングゲームの主人公とイメージがダブリ、壮大な物語を感じさせるのに充分な迫力と力を持っている。彼女の世界観がすでに確立されているので、今後も期待される。

池田精堂さんの木彫作品《記憶の形》は、鹿系の動物のようにも見える美しい形体を持ち合わせている。近作の《plumbing》は同様に木彫であるが、ボルトで木と木を繋いで行く方法で接ぎ木のような形体をしている。私見では過去作品の《記憶の形》の評価が高い。それは流れるような形的美しさにあると思うし、木が持つ素材感や展示空間への広がりを感じさせるからだろうか。

濱口拡美さんの作品《selfish astronomer》は、アースワークやランドアート系の作品なのかという疑問が頭を持ち上げた。直径約450cmの写真と映像を使った作品は、サイズにおけるインパクトを持つ。1960年代後半に登場したアースワークやランドアートからどのように学習し、現在の作品としたのだろうか。地球規模の真理や普遍性に立脚して制作していくなら、とても期待できそうだ。

由留木康人さんの作品《Hattifnatt》は、信じられないくらい薄い「陶」で出来ている。空調の風に反応して草のように揺れ動くさまは、素材の持つイメージを根底から崩すものだ。素材感が強調され、美術か工芸かという狭間で揺れ動く作品ではあるが、現代彫刻として考えたい。そうすると、モノとして持つ存在感や空間へのアプローチも弱く感じる。しかし、工芸が美術に打って出る真摯な態度と考えると挑戦的で気概のある作品だと感じた。

並木文音さんの作品《アイ惜》シリーズは、時計、ネックレス、写真立て、手鏡、腕時計、ぬいぐるみ、ピアス、下着、傘といったものを可燃し灰となって提示されていた。それらは彼女にとっての想い出の品なのか。思いを込めた品々を灰にする行為は、忘れ去ること忘れたいことを表現しているのか。石膏と灰が構成され、作品からは何故か死のイメージがつきまとう。人の死とモノの消失が重なり、視覚イメージはドイツの美術家アンゼルム・キーファーを彷彿させた。キーファーはドイツの歴史をテーマにしてきた作家だが、並木さんは個人史をテーマにしているようにも思えた。



KAWAMOTO Hikiko



SUZUKI Sayaka



OHISHI Miao



DOI Yuka



SAKAI Chie



HIRAGA Yoshino

【Bグループ】公開ディスカッションの様子(9月4日)